九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

接尾辞「的」の機能について

王，娟
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494576

出版情報：比較社会文化研究. 15, pp.141-147, 2004-02-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第15号（2004）141～147頁
Social and Cultural Studies
No.15（2004），pp. 141～147

接尾辞「的」の機能について

王（オウ）　娟（ケン）

1．はじめに

日本語の接尾辞「的」について、意味領域の広さ、あいまいさ及び表現上の流動性はよく指摘されてきた。一方、「的」が濫用されているのも現実である。国立国語研究所が1957年で行った十三種類の雑誌を対象とする語彙調査の結果から分かるように、接尾辞「的」は、「いる」「する」「こと」「なる」などの基本語と一緒に使用率の前十位に入った。50年代以後、接尾辞「的」の使用は、話し言葉にも書き言葉にも増え続けている（王娟（2003）に参照）。

このような接尾辞「的」は、日本語が第二言語として習得される場合には、一つの困難点になる。特に、中国人日本語学習者は、母語の影響もあり、接尾辞「的」を把握するには非常に難しいと言ってもよかろう。例えば、どのような語基が、「的」付きナ形容詞[1]になるのか、どのような語基が、非「的」ナ形容詞になるのか、これらの問題は、中国人日本語学習者が区別しにくいのが、現実である。

筆者は、意味論的な視点に立って、「的」の語基の特徴に関する使用実態調査と言語意識調査を行った。しかし、接尾辞「的」の全体像を取るには、「的」の機能を考察しないと足りないと考えて、本稿は、主に語基の文法的特徴及び意味的特徴を考察する上に、接尾辞「的」の機能を論じてみようと思う。

2．先行研究について

接尾辞「的」の機能を中心とする先行研究は、筆者の調べた範囲には見つからなかったが、以下の三点には、触れたことがある：

a．加納千恵子（1991）　「漢字の接辞的用法に関する—考察（4）—AJN化機能をもつ漢字について—」

b．山下喜代　（1999）　「字音接尾辞『的』について」

c．山下喜代　（2000）　「漢語系接尾辞の語形成と助辞化—『的』を中心にして—」

加納（1991）は、「反」「不」「的」などの接辞がAJN（相言類）化機能を持っていると主張している。しかし、加納（1991）は、各接辞の用法を中心に論説したもので、「的」の機能に関する考察を行っていない。

山下（1999）は、「的」の語基の意味分布については述べている。また、「A的B」における「的」の機能を次の三種類に分類している。

① 「的」がAの表す属性概念でBを限定する役割を果たす。

② 「的」が比喩を表す助動詞と同じ役割を果たす。

③ 「的」がある種の助詞や複合辞や語連続と同じ役割を果たす。

山下（1999）は、主に「的」の意味的機能について考察したのである。さらに、山下の考察は、以上の三点の「仮説」をもって、例を挙げて説明するというような形であった。可能な実例を考察して分類を行うという「記述」方法ではないから、足りないところがある。

山下（2000：60）は、文法的視点から「的」の機能を考察して、「的」の引用機能を指摘した。例として、

ex1：　でもひたすら食べているうちに脳内に「あー、人生これでいいのだ」的物質がほんわかと出てくる。

などが挙げられている。この例から分かるように、山下（2000）が考察した「的」の文法的機能は、「的」の前接部分が語ではなく、一つの文になるような、使用率があまり高くない場合に限るのである。「的」の語基の80％[2]近くも占めている漢字二字熟語については、考察していない。

この三点以外に、水野（1987）の「漢語系接辞の機能」が注目に値する。水野（1987：66）は、文法的視点から「的」が主に体言類・用言類・結合類の語基と結合し、結合形を相言類として、意味も添加すると指摘した。水野の

1　王・曲・林（2001）は、「的」が付くナ形容詞を「的」付きナ形容詞とし、「的」が付かないナ形容詞を非「的」ナ形容詞とした。以下この定義にそって分析する。

2　王娟（2003）「日本語の接尾辞「的」について—使用実態調査と言語意識調査から—」九州大学大学院比較社会文化学府修士論文の表9に参照。

指摘は、「的」の機能を考察するには、非常に貴重な手係りを提示していたが、具体的な実例と分析がほとんどなかった。

以上の現状を踏まえて、本稿は、主に実例を示しながら語基の文法的特徴及び意味的特徴を考察する上で、接尾辞「的」の機能を考察したい。よって、本稿ではより全面的に「的」の機能を捉えようと考えている。

3.「的」の文法的機能

接辞の文法的機能について考える前に、語基の文法的性格について考えておかなければならない（水野（1987））。ここでは、筆者が2001年に修士論文のために作ったコーパスの例を使用して、接尾辞「的」の語基の文法的性格について考察する。そのコーパスは、朝日新聞東京本社発行の朝刊の投書欄「声」（2001年1月1日から2001年12月31日まで）に基づいて作成し、「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞を中心とする内容である。以下、「朝日新聞『声』2001」と略す。その中に、「的」付きナ形容詞の語基を延べ語数1117、異なり語数291を抽出した。異なり語数291の中に、「非人間的」、「阪神ファン的」などの三字以上の複合語や混成語は、44語がある。これらの語の文法的性格を検討する前に、「非」のような接頭辞の機能を検討しないといけないから、本稿ではこの44語を以下の分類から排除する。残りの247の一字と二字の語基を、三省堂の『新明解国語辞典　第五版』（1997）によって文法的に六種類に分類する。それぞれの特徴は、次の表1のとおりである。「積極」「合理」などの語を造語成分とする説もあるが、本稿の分類は、三省堂の『新明解国語辞典　第五版』（1997）によって行う。

表1、語基の文法的性格

語基の種類	特徴	代表語基例	語例数
①「名詞」類	語基が、単に名詞の品詞を持つ。	端的、心的、社会的、基本的、精神的、歴史的、一般的、個人的、世界的、実質的、根本的、主体的、全面的、民主的　等	168
②「名詞・サ変動詞」類	語基が、名詞とサ変動詞の品詞を持つ。	徹底的、結果的、比較的、閉鎖的、総合的、批判的、否定的、対照的、限定的　等	66
③「名詞（造語成分）」類	語基が、自立できない語で、必ず接辞等と結合して用いられる。	知的、公的、私的、人的、多角的、大大的	6
④「名詞・ナ形容詞」類	語基が、名詞とナ形容詞の品詞を持つ。	経済的、平和的、合法的	3
⑤「名詞・副詞」類[3]	語基が、名詞と副詞の品詞を持つ。	将来的、絶対的、全体的	3
⑥「名詞・副助詞・接続助詞」類	語基が、名詞、副助詞、接続助詞という三種類の品詞を持つ。	一方的	1

表1から分かるように、接尾辞「的」は、名詞の品詞を持つ語基と結合し、ナ形容詞となる。⑥類の語基は、247語の中にただ一語であるから、ここでは現象として述べておくだけで、検討する余地はないと思う。

「的」付きナ形容詞の語基に一番多いのは、①類の語基である。しかし、名詞の品詞を持つ語は、全て「的」付きナ形容詞の語基になるわけではない。

柴谷・影山・田守（1982：59）には、特定の意味の場を形成する語群における語と語の間の意味関係を次のようにまとめた。

1、意味の類似
　　同義、包摂
2、意味の対立
　　非両立
　　二項対立
　　排反
　　反意
　　逆意
　　多項対立
　　系列的関係
　　周期性
　　累積的関係

3　「将来」、「絶対」と「全体」は、④類の語基と区別して、副詞としても使える。例：「全体君が悪いからさ。」（三省堂の『新明解国語辞典　第五版』（1997））

以上の説をもって、「的」付きナ形容詞の語基を考察すると、ある傾向が分かってきた。つまり、「的」付きナ形容詞の語基は、「排反関係」[4]、「反意関係」[5]、と「系列的関係」[6]の中において、少なくとも一つの意味関係で対立できる語がある。換言すれば、「的」付きナ形容詞の語基になるには、名詞の品詞を持つ上に、「排反関係」、「反意関係」と「系列的関係」、どっちかの意味関係で対立する語がいる。もし、このような対立する語は存在しないと、「的」付きナ形容詞の語基にはならない。例を挙げてみる(括弧内は、その意味関係で対立する語の一つを示す)。

「排反関係」：女性的（→男性）、男性的（→女性）

「反意関係」：具体的（→抽象）、一般的（→特別）

「系列的関係」：社会的（→家庭）、世界的（→地域）

これ以外の語、例えば周期性的関係を表す言葉「火曜日」「水曜日」、累積的関係を表す言葉「秒」「分」などは、以上の三つの意味関係のどれも満たせないから、「的」付きナ形容詞にはならない。他に、「括弧」のような名詞は、同じように「排反関係」、「反意関係」あるいは「系列的関係」で対立できる語が存在しないから、「括弧的な」のような「的」付きナ形容詞の言い方にはならないのである。

ここでは、接尾辞「的」の機能は、相言化よりむしろ語基と対立し存在するもう一つの相手を否定し、語基の特性を強調するのではないかと考える。例えば、「具体的な対策」は、「抽象的な提案ではなく、実際的で、細かい所まで取り上げる対策」と解釈できる。もう一つの例を考えてみよう。「世界的な視野」は、「自分の周りに限って考えるのではなく、世界全般にわたって考える」と表現したのである。

単に名詞の品詞を持つ①類の語基以外に、②類「名詞・サ変動詞」類の語基が一番多い。「的」は、②類の語基と結合する時、実際の動作より、その概念にかかわる抽象的な意味を表現しようと考えられる。それによって、次の二種類の意味が発生する：a．程度、レベルを表す（例：徹底的、比較的、平均的）b．動作が実際に行っていないかもしれないが、そのような性質がある状態である（例：閉鎖的、批判的、否定的）。ここでは、接尾辞「的」は、抽象化の機能を発揮していると考えられる。

「的」がナ形容詞の品詞を持つ語基と結合することはあまり多くない。一般的に、名詞の品詞とナ形容詞の品詞、両者とも持っている語は、連体修飾する時ナ形容詞の品詞を最優先して、非「的」ナ形容詞になる。例えば、「重要」「安全」「新鮮」「異常」「危険」「公平」などは、「重要的な」、「安全的な」、「新鮮的な」にならず、「重要な」、「安全な」と「新鮮な」になる。「経済」と「合法」は、三省堂の『新明解国語辞典　第五版』(1997) の表記によって、連体形に「的な」ではなく「な」、連用形に「的に」ではなく「に」を付ける用法もあるそうであるが、なかなか実例が見つからないから、今後の課題としたい。「平和」は、「平和的な」と「平和な」両者の使い方があるが、「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞によって意味が違う。「健康」という言葉も、同じ特徴がある。詳しい考察は、第五節で行う。

さらに、表1から分かるように、「的」が副詞の品詞を持っている⑤類の語基と結合することもあまり多くない。「将来」「絶対」と「全体」は、名詞以外に副詞の品詞も持っているから、連用修飾の場合に「～的に」と「～に」、どっちになるか考えてみよう。「朝日新聞『声』2001」を調べたら、次の例文がある。

ex2：　将来的には消費税を上げ、年金を削り、国民の貯蓄から搾り取るのだろう。（3月16日）

ex3：　さらに同年3月に閣議決定された「規制緩和推進3カ年計画」は、教科書について「将来的には学校単位の採択に向けて法的整備を含めて検討していくという必要がある」としている。（4月16日）

ex4：　研究者の中にも弁護士登録をしている人もいるが、全体的に実務から離れてきた感は否めない。（12月15日）

ex5：　こんな悲しい思いを絶対にさせたくない。（1月27日）

ex6：　私の友人の管制官は、自分が旅行するときは絶対に飛行機には乗らない、日本の空は狭くて過密で怖くて乗れないという。（2月5日）

「将来」と「全体」について、連用修飾として用いられる例は少なかった。一年分の『声』の文章を調べても、全部で上の3文しかない。また、ex2、ex3とex4から分かるように、「将来」と「全体」は、連用修飾として用いられる場合には、副詞の品詞より名詞の品詞が優先で、接尾辞「的」を付け加えて、「～的に」になる。一方、「絶対」は、

4　「排反関係」というのは一方を肯定することによって他方が必然的に否定される場合をいい、そのような関係にある言葉の一方を肯定しておきながら他方も肯定したり、双方を否定したりすると矛盾が起こるので、論理学では「矛盾」と呼ばれている（柴谷・影山・田守（1982:55））。

5　…反意語の場合は、一方を否定したからといって必ずしも他が意味されないという性質を持っている。…反意関係は一般に或る尺度を表現する語、つまり比較表現の可能な語に見られる。柴谷・影山・田守（1982:56）

6　階層を持つ対立の1つは「系列的関係」である。柴谷・影山・田守（1982：59）。

「将来」と「全体」と違って、連用修飾として用いられる場合には、名詞の品詞より副詞の品詞が優先で、接尾辞「的」を付け加えなくて、「～に」になる。つまり、接尾辞「的」は⑤類の語と結合する時、とても不安定な状態になっている。この現象は、各語基の特性か意味とどのような関連があるのか、一歩進んで探究する必要がある。

4.『分類語彙表』によって分析した「的」の機能

山下（1999）は、接尾辞「的」の限定、比喩及び語連続という三つの機能を指摘している。本節では、接尾辞「的」の付くか否かによって語基の意味にはどのような変化が起こるかに着目して、後続語との関連も考えながら、接尾辞「的」の機能について検討しようと思う。

まず、接尾辞「的」の付く前後に、語基の表す意味の変化を確認するために、国立国語研究所の『分類語彙表』（1964）に出現した漢字二字熟語及びその漢字二字熟語を「的」と結合する場合の意味分類を調べてみた。結果は、次の表2にまとめている。全部で22語がある。

表2　「的」付く前後の意味分野の変化（22語）

	小項目名		小項目名
観念	「話題・概念など」	観念的	「意味」
経済	「経済・収支」	経済的	「経済」
合理	「論理・うそ・誤り・訂正など」	合理的	「関係」「意味」
女性	「男女」「生物」	女性的	「快活・柔和・勇猛」「生・性」
相対	「相対」	相対的	「相互・異同」
男性	「男女」「生物」	男性的	「快活・柔和・勇猛」「生・性」
致命	「死」	致命的	「健康」
中心	「中・かみ・しも・頂・すみ」	中心的	「場所」
抽象	「話題・概念など」	抽象的	「意味」
挑発	「命令・制約」	挑発的	「交渉・交際」
徹底	「通過・普及など」	徹底的	「限り・全く」
比較	「比較・区別・選択・参考」	比較的	「かなり・はなはだ」
本格	「本体」	本格的	「真・正」
末梢	「前後・間・端」	末梢的	「場所」
楽天	「安心・焦燥・満足」	楽天的	「頑固・率直・気軽」
理論	「論理・うそ・誤り・訂正など」	理論的	「意味」
歴史	「文化・歴史・風俗」	歴史的	「風俗」
画期	「比較・区別・選択・参考」	画期的	「新しい・古い」
客観	「話題・概念など」	客観的	「意味」
主観	「話題・概念など」	主観的	「意味」
衛生	「医療」（仕事類）	衛生的	「衣食住」
論理	「論理・うそ・誤り・訂正など」	論理的	「意味」

以上の22語は、「的」の付く前後の意味分野の変化状況について、以下の三種類に分類できると思う。

① ただ語基の品詞を変えること。

この種類に分類される語基は、「経済」「相対」「中心」「比較」「末梢」「楽天」「歴史」がある。その中に、「経済」と「経済的」のように、その属している意味項目は、一致している場合もあるし、「楽天」と「楽天的」のように、意味項目の名前が違っても、同じく人間の気持ちを表して、あくまでも項目の具体的な内容が同じだと考えられる場合もある。

ここで、「的」の機能としては、語基の品詞を名詞からナ形容詞に変えて、後続語に修飾するのである。つまり、接尾辞「的」の付く前後の意味分野は、あまり変わらず、「的」は品詞転換の役割を果たすと言えるであろう。

② 語基の品詞を変える上に、語基に新たな意味を付け加えること。

語例としては、「女性」と「男性」である。『広辞苑』（第五版）の「女性」に関する説明は、「①女。女子。婦人。また、その性。②文法用語：男女、雌雄の区別」と書いてある。やはり単純な「生・性」という概念の意味を表している。一方、「女性的」の場合は、「①女性らしいさま。女性にふさわしいさま。②やさしくておだやかなさま。『－な景観』」と解釈されている。「女性的な景観」の例を考えてみると、もともと単純な生物の性別だけを表す語彙は、「的」の添加によって、生物だけではなく、「景観」のような無生物までも修飾できるようになった。「男性」の場合も、同じ意味の拡大が見られる。「男性的な岩山」という出された例に、「男性」が「荒々しく力強いさま」の意味で無生物「岩山」の様子と雰囲気を表現している。

つまり、接尾辞「的」が付くことによって、語基の本来の意味を保存する上に、語基の意味の拡大または派生も起こる。上述の「女性」と「男性」は、生物から無生物への拡大の例である。無生物から生物への拡大について、「機械」の例を考えてみよう。「機械」は、「主に人力以外の動力による複雑で大規模なものをいう」（『広辞苑』第五版）として無生物だけに使用されているが、「機械的」は、「単調な動きをみせるさま」、「個性的でなく、型どおりのさま」などの意味で、人間にも使えるようになる。

③ 語基の品詞を変える上に、語基の意味を変えること。

語例としては、「観念」「客観」「合理」「致命」「抽象」「挑発」「徹底」「本格」「理論」「画期」「衛生」「主観」「論理」などがある。例えば、「観念」「抽象」と「客観」は、「題材」、「話題」、「仮説」及び「議案」、「考えもの」などの語彙と一緒に「話題・概念など」の意味分野に分類されているが、「観念的」「抽象的」「客観的」の方は、「有意義」、「多義」、「滑稽」、「猟奇」などの語彙と一緒に「意味」の

項目に入れられている。また、「挑発」はもともと属している「命令・制約」の項目から「挑発的」の「交渉・交際」の項目まで移動する変化も、「徹底」は「通過・普及など」の項目から「徹底的」の「限り・全く」の項目までの変化も、同じである。

『日本語教育ハンドブック』(1990：489) には、接尾辞「的」の機能について、「もとの語の品詞を変える」と説明しているが、以上の分析から、接尾辞「的」の機能はそれより多様であることが分かった。が、上述の一般的な語基以外に、また「的」付きナ形容詞としても非「的」ナ形容詞としても使われている特殊な語基がある。以下では、このような特殊な場合における「的」の機能について論述する。

5.「健康」と「平和」に関する論述

王娟 (2003) では、「朝日新聞『声』2001」の使用実態調査とマインドマップの言語意識調査の結果に、「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞と両者とも使用されている語基があると述べた。本節では、辞書で両者の使い方が共に出現した「健康」と「平和」を取り上げて、分析しようと思う。

ここでは、用法と意味の対応関係を分析する時に、主観的な判断を避けるために、「健康」と「平和」の用法と意味に関して、日本語母語話者に対するアンケート調査を行った。有効回答数は24名であった。被験者の年齢層及び男女比の状況を、表3に示す。

表3　アンケート被験者の年齢と男女分布

	10代	20代	30代	40代	合計
男	4	7	1	1	13
女	2	9	0	0	11
合計	6	11	1	1	24

アンケートでは、「健康」と「平和」について、それぞれ四つの例文を取り上げて、各例文に「的」の用法と意味をめぐって、被調査者に選択肢を選択させたり、感想を書かせたりした。

まず、「健康」について、アンケートの結果を見る。四つの例文は、以下のようである。(「○」をつけているのは、原文の用法である。)

1．○健康な／健康的な人なら5分ほどのところ、30分はたっぷりかかった。

(朝日新聞『声』2001年4月)

2．健康な／○健康的な生活を送る。

(『広辞苑』第五版)

3．健康な／○健康的な食べ物。

(『広辞苑』第五版)

4．○健康な／健康的な歯茎と病気の歯茎を、自分で区別できるように教えてあげなければならない。

(朝日新聞『声』2001年8月)

調査の結果によれば、各例文に関して八割以上の被調査者は、原文の用法に同意している。また、「健康」という語基に関して、「的」の付くか否かによる意味の違いは、以下のような傾向が強く見られた：

「健康な」―　からだの各部分に、ぐあいの悪い所が無く、気力の充実している状態。

(『新明解国語辞典』)

「健康的な」―　健康そうなさま。健康によいさま。

(『広辞苑』第五版)

つまり、「健康な＋後続語」には、後続語が健康の主体であり、その主体自身の現状について健康かどうかを判断するのである。例えば、「健康な人」は、「その人には、ぐあいの悪い所がなく、元気な様子である」と解釈できる。「健康な歯」は、「その歯は、虫歯などの問題がなくて、正常な状態である」と表現したいのである。一方、「健康的な＋後続語」には、後続語が健康の主体ではなく、その「後続語」によって別に存在している主体の健康の目的を達するものである。例えば、「健康的な生活」は、「『生活』ということ自体は、健康であるかどうかの問題ではなく、このような生活を送ったら、生活している人は健康になる」という意味を表している。「健康的な食べ物」は、「その食べ物自体は、健康であるのではなく、その食べ物を食べたら食べる人は健康になりそうだ」という意味を表現する。「健康な」及び「健康的な」と後続語の関係は、図で表現すれば、以下のようになる。

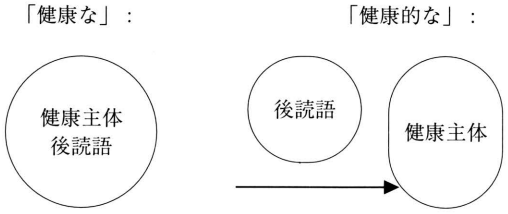

図1　「健康な」と「健康的な」

図1から、「健康な＋後続語」には、「健康」と後続語の関連が、「健康的な＋後続語」より強いという特徴が分かっ

てきた。

続いて、「平和」について、アンケート調査の結果を分析しよう。四つの例文は、以下のようである。(「°」をつけているのは、原文の用法である。)

1．日本は世界で最も°平和な／平和的な国の一つだろう。

(朝日新聞『声』2001年1月)

2．あの子たちは、いつになれば、このような°平和な／平和的な時が過ごせるのかと。

(朝日新聞『声』2001年10月)

3．平和国家としてアメリカに対しても、パレスチナやイスラエルに対しても、平和な／°平和的な解決がはかれるように積極的に発言することだと思う。

(朝日新聞『声』2001年9月)

4．日本は、平和な／°平和的な国際貢献をすることこそが、世界で名誉ある地位を占める道である。

(朝日新聞『声』2001年10月)

調査の結果によれば、各例文に関して八割以上の被調査者は、原文の用法に同意している。また、「平和」という語基に関して、「的」の付くか否かによる意味の違いは、以下のような傾向が強く見られた：

「平和な」— 戦争がなくて世が安穏であること。また、おだやかで変わりのないこと。

(『広辞苑』第五版)

「平和的な」— おだやかあるいは平和な状態になることを目標としての取り扱い方。

(筆者は、事前に四人の日本語母語話者に対するインタビューの結果によって作成)

この傾向には、「健康」の場合との類似点が見える。つまり、「平和な＋後続語」には、後続語(国、時)が、平和の主体であり、その主体自身の現状について平和かどうかを判断するのである。例として、「平和な国」と「平和な時」がある。

一方、「平和的な＋後続語」には、後続語(解決、国際貢献)が平和の主体ではなく、主体の平和の目的を達するため使われる手段か努力である。例として、「平和的な解決」と「平和的な国際貢献」がある。

「平和な」及び「平和的な」と後続語の関係は、図で表現すれば、以下のようになる。

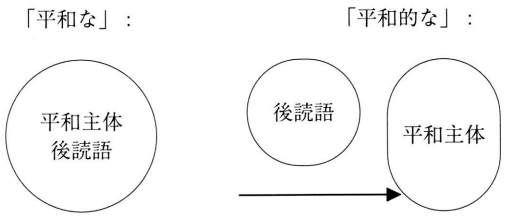

図2　「平和な」と「平和的な」

図2から、「平和な＋後続語」には、「平和」と後続語の関連が、「平和的な＋後続語」より強いという特徴が分かってきた。この特徴は、「健康」の場合と一致していると言えるのであろう。つまり、接尾辞「的」は、「平和」「健康」と結合する場合に、非「的」ナ形容詞と較べると、語基と後続語の距離が大きく、関連が弱くなると考えられる。

「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞に語基と後続語の関連について、アンケートの被調査者から以下のような感想を得た：

① 「的」を使うと、あまり定かではないから…何か平和について、動いている感じ。

② (「平和的な」について、)口では平和と言ってて、ウラで手を回してそう。

③ (非「的」ナ形容詞は)断定、(「的」付きナ形容詞は)理想

以上の感想を整理すれば、非「的」ナ形容詞は、断定か現実になったのを表現しているが、「的」付きナ形容詞は、その後の名詞との意味関係が断定より不安定な要素を含んでいて、話し手の個人の理想を表現することで、ある程度主観性があると言えるであろう。その点でも本稿の前述の分析結果と一致している。

以上のようにアンケート調査の結果について分析をしてみた。分析から分かるように、接尾辞「的」は、①ただ語基の品詞を変える、②語基に新たな意味を付け加える、③語基の意味を変える、という三つの機能がある。と同時に、語基と後続語との関連に様々な「不確定さ」を招く。まさにこの「不確定さ」は、「的」付きナ形容詞のあいまい性になるであろう。鈴木(1978：14)は、「とくに悪い方向においてものをいおうとする場合に、そのものをズバリといわずに、それらしいにおい、それらしい雰囲気を感じたという逃げ道を用意して、遠慮がちな姿勢でものをいうことができる」というように、「的」の役割を論説した。日本語の言語表現について、「曖昧さ」「婉曲さ」という特徴がよく指摘されているが、その中に、接尾辞「的」も一定の役割を発揮したとも言えよう。

6．終わりに

本稿は、接尾辞「的」に関する先行研究には、むしろ一つの空白として残された問題、つまり「的」の機能を取り上げて、語基の文法的特徴と意味的特徴から考察をしてみた。分析から分かるように、「的」の機能は、相言化よりずいぶん多様である。

第三節では、「朝日新聞『声』2001」の実例を使用して、接尾辞「的」の語基を文法的特徴から分類した。その分析から分かるように、「的」は、相言化の機能を持つ以外に、意味添加と否定・強調の機能も働く。第四節は、国立国語研究所の『語彙分類表』(1964) を基準にして、語基の意味的特徴の変化から接尾辞「的」の機能を考察した。以下のような三点にまとめることができる。

① ただ語基の品詞を変えること

② 語基の品詞を変える上に、語基に新たな意味を付け加えること

③ 語基の品詞を変える上に、語基の意味を変えること

以上の三点から、第三節の考察結果と類似した傾向が見える。さらに、第五節では、「健康」と「平和」二つ特別の語基を取り上げて、アンケート調査を行った。調査結果の分析から、接尾辞「的」は、語基と後続語の間の関係を不安定にするか、または関連を弱くするかの要因になるという特徴も分かった。

本稿の分析結果は、中国人日本語学習者を悩ませる「的」付きナ形容詞と非「的」ナ形容詞の区別の問題の解決には、一つの手口になると思うが、実際にどのように対応されているかは、今後の課題としたい。

参考文献

王娟・曲志強・林伸一（2001）　「『的』付きナ形容詞と非『的』ナ形容詞の分類と意味的特徴」山口国文第二十四号

王娟（2003）「日本語の接尾辞『的』について―使用実態調査と言語意識調査から―」九州大学大学院比較社会文化学府修士論文

加納千恵子（1991）　「漢字の接辞的用法に関する一考察(4)―AJN化機能をもつ漢字について―」『文芸言語研究　言語篇』第20巻　筑波大学文芸・言語学系

金田一京助（ほか）編（1997）　『新明解国語辞典』第五版　三省堂

国立国語研究所著（1965）　『分類語彙表』国立国語研究所資料集6　秀英出版社

国立国語研究所著（1987）　『雑誌用語の変遷』国立国語研究所報告89　秀英出版社

柴谷方良・影山太郎・田守育啓（1982）　『言語の構造(意味・統語編)』くろしお出版

鈴木修次（1978）　『漢語と日本人』みすず書房

新村出編（1998）　『広辞苑』第五版　電子ブック版　岩波書店

日本語教育学会（1990）　『日本語教育ハンドブック』大修館書店

水野義道（1987）　「漢語系接辞の機能」『日本語学』VOL 6　2月号　明治書院

山下喜代（1999）　「字音接尾辞『的』について」『森田良行教授古稀記念論文集』明治書院

山下喜代（2000）　「漢語系接尾辞の語形成と助辞化―『的』を中心にして―」『日本語学』VOL19　11月号　明治書院